

Ⅲ-14 [コラム] 湯舟坂 PROJECT の 関わりの中で須田区の未来を考える

岸本 卓也

私が京都府立大学 ACTR をきっかけに立ちあがった湯舟坂 PROJECT に携わるようになったのは 2020 年、須田区の副区長を務めていた時のことである。私の職業がフリーランスのデザイナーだったということもあり、須田区の役員としてこのプロジェクトに関わっていく中で、成果報告会のポスターや資料集の表紙・目次をデザインさせていただくこととなった(図1)。

須田区の人間としては湯舟坂2号墳の PR に一役立てるこの仕事は嬉しくもあり、また大変光栄なことでもあった。

私は生まれも育ちも久美浜町の須田で、この歳になるまで約 50 年の歳月を須田で過ごし、湯舟坂2号墳の変遷をこの目で見てきた。

湯舟坂2号墳が発掘されたのは私が小学校5年生の時のことである(写真1)。発掘当時の反響は凄まじく小学校には取材のヘリコプターが着陸し、家の前の道路は現場に訪れる人で



図1 第1回成果報告会ポスター
(新型コロナウイルス感染症の影響で1月23日、
5月29日は延期となり、7月24日に開催した)



写真1 湯舟坂2号墳現地説明会



写真2 湯舟坂2号墳現地説明会(須田公民館)

列となり、須田区の公民館には出土品を一目見ようと大勢の人が押し寄せた（写真2）。

その光景を間近で見て「すごい物が発見されたんだな」と思うと同時に、自分の住んでいる須田から発見されたということにちょっと誇らしくも思った。発掘の翌年から始まった古墳祭りは須田区の一大会となり、須田区外からも大勢の人が訪れ、私も子どもの時はそこでたこ焼きや焼きそばなどを食べ、成人し親睦会員となってからはバザーなどをしてお客さんをもてなす側となり17年に渡り続いた古墳祭りは大成功だった。

2007、2008年度には古代の丘公園の整備事業として竪穴式住居、高床式倉庫を建てた。兵庫県豊岡市の神鍋高原にまで屋根材の茅を刈りに行き、夜まで作業したのは良い思い出となっている。

こうやって微力ながら湯舟坂2号墳や須田区のPRに関わってきたわけだが、歳月が経ちイベントも慰霊祭のみに縮小したことで須田区民の関心も薄れていったように思う。竪穴式住居、高床式倉庫に至っては老朽化が進み、修繕するにしても須田区の財政を圧迫するため、維持をしていくことが難しくなっている、というのが現状である。

そんな中で迎えた湯舟坂2号墳発掘40周年の直前に立ちあがった湯舟坂PROJECT。成果報告会も3回開催され、須田区にも多くの府立大生が調査に来てくれ、ふるさと委員会の事業などにも参加してくれている。高齢化が進んで、古墳公園の維持管理のための草刈りが重荷となっている須田区としては大変ありがたいことである。

湯舟坂PROJECTでは金銅装双龍環頭大刀をモチーフにしたロゴをデザインさせていただき（図2）、府立大の学生がデザインしたポロシャツやその他印刷物に使われている。ポロシャツは大変好評で、区民の中にも着ていただいている方がおり、嬉しい限りである。

湯舟坂PROJECTも5年目に入り、継続して関わってきた私は今、京都府立大学と須田区との連絡係としてパイプ役を担っている。主な仕事は須田区の事業（主としてふるさと委員会の事業）に学生の協力を依頼したり、調査の拠点となる公民館の使用の手配などである。学生達も忙しい中、須田平野古墳の解説板制作や設置、慰霊祭の参加、古代の丘公園・湯舟坂2号墳の草刈りなどを積極的に協力してくれた。事業のあとに慰労会などを開く中で学生と区民との交流も少しずつでき、若い人達の考えに耳を傾け、湯舟坂2号墳や古代の丘公園の活用法、これからの須田区のあり方など薄れかけていた地域の文化財への関心を再び呼び起こすヒントをいろいろもらっている。

このつながりを継続し、未来の須田区が人々で賑わうことを期待している。



図2 湯舟坂PROJECTのロゴマーク

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2